

自分の人生は自分で切り開く



杉村貴子 ジャパンビジネスラボ社長

すぎむら・たかこ——昭和49年東京都生まれ。青山学院大学経済学部卒。平成5年第37代ミス東京。7年からテレビ朝日のお天気キャスターとして活躍。9年に日本航空のCAとして勤務。10年ジャパンビジネスラボ創業者、杉村太郎と結婚。12年夫の留学を機に渡米。帰国後、BS朝日のニュース番組のキャスターを担当。19年証券アナリスト(CMA)として大和総研に入社。23年夫・杉村太郎の逝去を受け、26年よりジャパンビジネスラボ社長に就任。一男一女の母。著書に『杉村太郎、愛とその死』(河出書房新書)がある。

一度しかない人生を大切に生きてほしい

御社が発行する『絶対内定』は、就職ガイドブックとして九年連続大学生協売り上げ一位、累計発行部数は百五十六万部突破という快挙を成し遂げられていますね。杉村 ありがとうございます。多くのご支持をいただき、創刊二十五年を迎えることができました。「世のため人のため社会のため」がひいては自分のためになる。そしてそれが真の幸せである。だからこそ、自分が何ができるのかを最大限に考えて生きてほしい。

そんな思いを掲げている就活本が、こんなにも多くの方に読んでいただけるほどありがたいこととはありません。『絶対内定』では百枚近いワークシートを通じて自己分析をしていくのですが、その原点には「我究館」と呼ばれる日本初のキャリアデザインスクールがあります。

これは弊社の創業者であり、私の夫である杉村太郎が、平成の松下村塾を目指して一九九二年に創設した「塾」です。大企業の人事部長として学生と接していた太郎

が、受動的に生きる学生が大勢いることに衝撃を受けたことが設立のきっかけでした。

我究館では就職前に働く意義や人生の目的を徹底的に語り合い、仲間とともに本気で自己研鑽し合っていて、これまで単立っていった卒業生は八千五百人以上。第一志望内定率は九十・七％に達しています。また、太郎がハーバード・ケネディスクールに留学したことを機に、二〇〇一年には勉強法の指導や進捗管理をメインに行う、日本で初めての語学コーチングスクール「プレゼンス」も立ち上げ、この二つがいま弊社の事業の柱になっています。

全く別の事業に見えますが、この二つの根底は同じで、一人でも多くの人に、たった一度しかない人生を大切に、主体的に生きてほしいという願いを込めています。

確率ではなく可能性を信じる

——ご主人である太郎さんとの出逢いをお聞かせください。

杉村 太郎は私の十一歳年上で、私が学生の時に先輩の紹介で知り合い、その時は「我究館の杉村太

第一線で活躍する女性

郎さん」という印象しかありませんでした。社会人になって再会し、そこで意気投合して、一九九八年に結婚しました。

その後は出産、復職、転職と私も子育てをしながらキャリアを重ねていて、太郎の事業も順調に進む中、青天の霹靂の出来事が起こりました。二〇〇四年、太郎に原発不明が見つかってからです。

——幸せの最中、突然の宣告……。

杉村 がんの原因は見つかったのではないのに転移が広がっていく希少がんで、七年半に及ぶ闘病生活の末に、二〇一一年、四十七歳で亡くなりました。

闘病生活はお互いに絶対に治すと信じ切っていて、「絶対」を「信じる」、「大丈夫」。この言葉が私たちの生きる力だったと思います。お互いに不安な時はあったかも知れませんが、「ひよっとしたら」などネガティブなことは極力考えないようにしていましたね。

余命を意識しなければならぬような局面もありましたが、「確率」ではなく、「可能性」を信じていました。

——ああ、確率ではなく、可能性を信じる。

杉村 確率論で言えば僅か数％なのかもしれないけれど、決してゼロではなく、可能性はあるのだから、できることをしよう。太郎は闘病生活の中で、病院で寝ていた期間が何か月かあったわけではなくて、倒れる前日まで全力で仕事をしていました。

その前日というのが会社の中期経営計画発表で、大任を果たした翌日に意識を失ったのです。「人々の人生を輝かせたい」ということが太郎の夢であり、生きる目的でした。だからこそ、生存確率以上に、充実した人生を送れたのだと思います。

——天寿を全うされたのですね。

杉村 亡くなった時、もちろん悲しくて、寂しかったのですが、「本当によくやったね。お疲れさまでした」、この言葉しか出てきませんでした。

——というの、実はもっと生きてほしくて、私はドクターに掛け合っていたのです。でも、「杉村さんは本当によく頑張っています。でも、体はもう限界だと思っています」と言われ……。その時に、彼はやり切ったんだ、肉体的にはもう限界なんだと痛感し、誰が彼に「よ

くやったね」と言ってくれられるんだらうと考え、私しかないという気づきました。彼に届いたかは分かりませんが、最後にそのひと言を伝えました。

太郎は倒れる前々日にも、溢れんばかりにいろいろな想いを話し始め、最後に、「やりたいことは次々と出てくるけど、やり残したことはない」とつぶやいたんです。

——やり残したことはない、と。

杉村 そう言い切れるのは、きっと「確率」ではなく、「可能性」に懸けて、一分一秒を真剣に生きてきたからだと思います。

彼は最初に入院した時「ガンになつてよかった、と思える人生を送る」と宣言し、本当にそのとおり、彼は彼らしく生き切りました。

常に全力常に真剣

——そんな太郎さんから特に学ばれたことはありますか。

杉村 たくさんあるので一つだけ選ぶことがとても難しいのですが、すべてにおいて全力で、真剣に生きる姿勢です。仕事はもちろん、娘と遊ぶ時も、病気に対しても全力で向き合っていました。

心に残っているのは、闘病しながらも常に執筆していた『絶対内定』は、自分の遺書だと言っていたことです。「タイピングしている爪の先から、血が滲み出るような思いで、ひと言ひと言を、一文字一文字を、これから未来を担う若者たちに向けて書いています」と言っていました。

決して長いとは言えない人生でしたが、私をはじめ、太郎の言葉によって人生が変わった人は大勢いると思っています。ありがたいことに「心の中に太郎さんが生きている」「一緒に頑張っている気がする」と話してくれる卒業生がいまもいます。

——太郎さんが亡くなられて三年後に会社の経営を継がれましたね。

杉村 太郎は企業理念や仲間の輪を残してくれましたので、絶対に対にそのバトンを次に繋げるという思いが強くありました。ただ最初は、私は社外の役員という形で見守り、社員の方々が中心となってやれるのがベストだと思っていました。しかし、社外だからこそ経営が傾き出す兆しにいち早く気づき、仲間と一緒に会社を立て直そうと決心して前職を辞し、現職

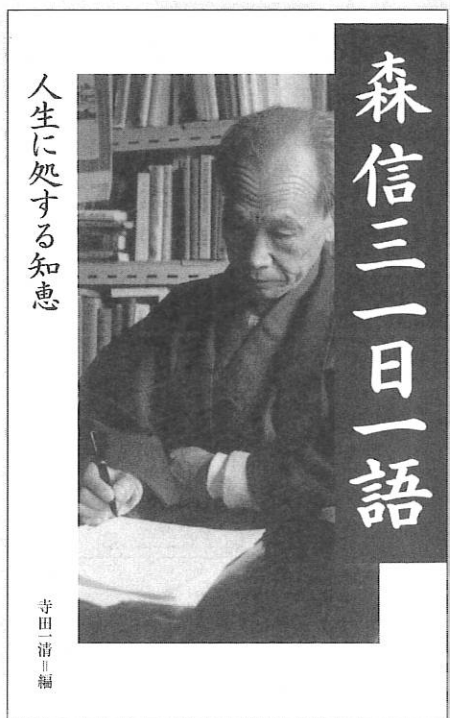
森信三師の二大金言集

森先生の遺された膨大な言葉を渉猟する中で、改めて先生の生涯を振り返り、先生の一生を貫いたものは、「一剣を持して起つ」の気概ではなかったか、と思いついた

本誌
11頁で
ご紹介

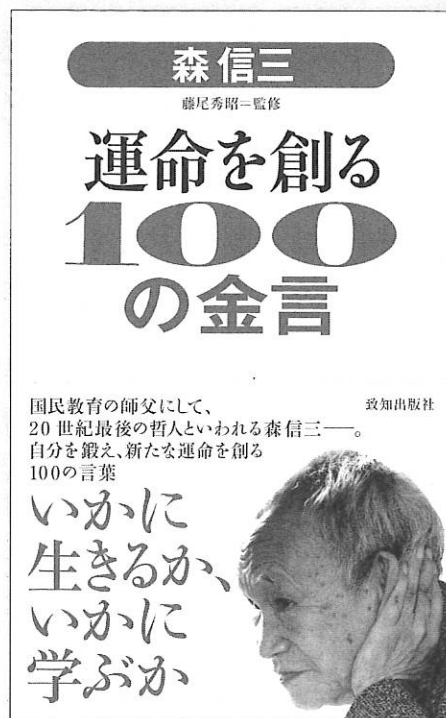
「一剣を持して起つ」という境涯に到って、人は初めて真に卓立して、絶対の主体が立つ。甘え心やもたれ心のある限り、とうていそこには到り得ない

すべて一芸一能に身を入れるものは、その道に浸り切らねばならぬ。牀中の全細胞が、画なら画、短歌なら短歌にむかって、同一方向に整列するほどでいなければならぬ。つまりわが牀の一切が画に融け込み、歌と一体にならねばならぬ



森信三 一日一語

森信三=著 寺田一清=編
定価=本体1,143円+税/新書判



森信三 運命を創る100の金言

森信三=著 藤尾秀昭=監修
定価=本体1,100円+税/B6変型判上製

第一線で活躍する女性

2000年、ご友人の結婚式に参加された時の様子
(左:太郎さん 右:杉村さん)



に就くことになりました。就任当時、どんなことを心掛けたか。杉村 やはり太郎というカリスマがいなくなった影響はとて大きかったのですが、逆境をチャンスにしようと、できることから一つずつ取り組みました。業績が悪化しているという事は、会社全体の地場も悪くなっているという事で、そういう状態の時ほどよくないことが二度、三度続きます。当社も人が辞めていき、社内に不安なムードが漂い始めた時もありましたが、そこで私も一緒になって不安がるのが一番いけないことだと思っていたので、「信念を持ったらぶれない」、それだけを心掛けました。

社員の方によくお伝えしていることはありますか？杉村 それは三つありまして、一つ目は「凡事徹底」。目の前にあることをコツコツ徹底して大事にすることが、最終的には差別化に繋がると信じています。もう一つが「百折不撓」。これは先ほど申し上げたとおり、どんなに困難な状況でも、決して信念をぶらさないということです。そして最後が「売り上げ」です。これはお客様にいかにお客様できたかのパフォーマンスなので、自信を持って数字を追いかけ、目の前のお客様を大事にしましょうと言っています。こうした言葉を常に皆に伝えるようにして、毎月の給与明細には必ず、二十五名の社員一人ひとりにメッセージを添えています。私は特別に才能があるわけではなく、頑張っている人がついてきてくれるもので、結果としてチャンスの神様が助けてくださるのだと思います。様々なご縁に恵まれ、多くの人から手を差し伸べていただけたことで、一年で財務状況を好転させることができました。

自分の人生は自分で切り開くもの。特に心の糧にされてきた言葉はありますか？杉村 それは太郎も好んで使っていた「前へ進め」という言葉です。どんなに辛い壁にぶち当たっても、前に進めば必ず状況は変わります。太郎が亡くなった時は人生のどん底でしたが、そんな状況でも子供たちはどんどん成長していく。私が止まっていたのは、一歩ずつでも足を動かし続けました。振り返れば、私はこれまでキャスター、キャビンアテンダント、証券アナリストなど、様々なジャンルの仕事をやらせていただきましたが、どれも目の前にチャンスが来た時に、他の人を選択を委ねたり、嫌々行うのではなく、自ら「イエス」と言って、主体的に一歩を踏み出してきた足跡なんです。その結果、異なる仕事の経験がすべていまの経営に生きています。自分で選択した道だからこそ、経験を生かすことができた。杉村 それに、自分のためだけだったら挫けてしまうことでも、誰かのためと思えば、どんな困難でも乗り越えていけると思っています。太郎は「人生の最大の喜びは、自分が幸せになることではなく、人の幸せにいかにお客様できるかだ」と言っていました。私にとってこの仕事はまさにそのとおりで、太郎の思いを継承すると決め、そのため自分は何ができるのかだけを考えてきました。

今後困難なことは多々あると思います。しかし、目的を持って主体的に生きていけば、必ず乗り越えることができます。その分喜びも一段と大きいと信じています。そうした思いをもとに、去る九月には「ワーク・ライフデザイン」を軸にした新たな事業を立ち上げられましたね。杉村 はい。たった一度のこの人生をどのように生きるのか。ワークとライフのバランスを取るだけでなく、自らの運命をデザインし、主体的に人生を生きていくことを目指すコーチングスクールです。人生は自分で切り開くものだと思っています。私は太郎の人生の伴走者として、いまできることに全力で、真剣に努めながら、今後太郎からのバトンを繋いでいきたいと思っています。